

私の児童生徒時代の国語の授業を振り返ってみる。

小学校時代はというと、思い出に残るような国語の授業はない。だが、漢字の読み、書き、筆順など、基本的なことをきちんと教えていただいた気がする。その点は感謝している。大いに役立っている。

中学校時代は、3年間で3人の先生方にお世話になった。共通していることは、まあつまらない国語の授業であったことである。あまりにもつまらないので、授業中は、教科書の好きなページを自分で読んでいた。テスト勉強は特別しなかった。する必要もなかった。漢字は自分で勉強したし、ワークブックを一通りやれば問題なかった。国語便覧のような資料集を読むのは好きだったので、そこから知識を得ることができた。私は断言できる。中学校時代の私に、もし国語力、読解力がついたらとすれば、それは国語の授業で培われたものではない。その大半は中学校時代の読書量と質によるものである。

私は、中学校の国語の教師をしていたことがある。国語の研究会で実践発表をしたことがあった。その冒頭で「私が受けた中学校時代の国語の授業はつまらなかった。自分が中学校の国語の教師になった以上は、自分が受けたようなつまらない授業は絶対しないと思って授業をしている」のようなことを話した。生意気である。怖いもの知らずである。若気の至りである。今となっては恥ずかしい限りである。穴があったら入りたいとは、このことである。

だが、話した内容は本当のことである。常に、自分の授業に対して「これでいいのか。もっと違う方法はないのか。こんな授業で生徒に力をつくのか」と自問自答してきた。すると、アイデアが出てくる。本も読む。人の話も聞く。そうやって自分の引き出しを増やしていく。高校の国語の先生方は、自分が受けてきた国語の授業にそんなに魅力があったのだろうか。そうは思えない。中にはすばらしい国語教師に出会えた方もいることだろう。それがきっかけで国語の教師になった方もいるかもしれない。先日私が参観した古典の授業のように、昔のままの授業が今でもたくさん展開されている。内容もそうだが学習効率がわるい。もう少し工夫というものができないだろうか。工夫しようとしていないのか。する気はあってもアイデアが浮かばないのか。

先日、授業を参観していて気づいた。教師が生徒のことを見ていない。一人一人のことを見ていないし、把握していない。たぶん生徒を集団として見ている。学習は個人に成立しなければならない。こういう授業をしたい。こんな授業はどうだろうか。あれこれと考える。教師にとって想像力の貧困は致命的である。もっと自分が生徒だったらと考えてみてはどうだろうか。そうすると、自分が今行っている授業にたくさんの疑問符が付くはずである。ねらいが曖昧なままに何となくやっていることが多い。そこに生徒一人一人の存在は見えてこない。

先日の古典の授業では、「四面楚歌」の状態にある「項羽」の身になって考えることで、様々な考えが出てくることになる。本文の読解をもとにはするが、絶対的な正解があるわけではない。授業者もオープンエンドだと言っていた。お互いの考えを出し合い、その違いを認める。そして、また一人で考えることで深まっていく。これは学校でなければできないことである。こういった授業を通して、生徒は古典にますます興味をもち、もっと他の古典作品を読みたいと思うようになる。難解な古典文法に対しても意欲的になれる。授業を離れて「項羽」と「劉邦」について調べてもいいだろう。

アクティブラーニングとは、国語の場合、まずは旧態依然とした昔の授業を捨てることである。モデルがいくつかあるわけではない。一人一人の国語教師が自分の授業の殻を破り、現状を打破した先に見えてくるものである。そこには、目の前の生徒の姿があるはずである。生き生きと自分の脳みそを使って考える一人一人の生徒の姿である。生徒の脳みそに汗をかかせるような授業をしたい。多くの国語の先生方よ、そろそろ国語の授業を変えようではないか。そうしないと、我々国語教師は、それこそ「四面楚歌」になってしまう。